

学校教育は地域の持続可能性にいかに関与できるのか？（２）  
 ー飯田市竜丘地区における住民の組織的継続的な実践に着目してー  
 Schools can contribute to the sustainability of the community?

茹 今\*

Jo Kon \*

\*東京農工大学大学院

[要約]本研究は、地域住民が地域づくりの活動を展開する際に必要となる自己教育活動を援助し組織化する実践としての地域づくり教育に着目し、学校と地域との間でこれまで、どのような連携がなされてきたのか、その連携の中で学校が地域の教育にどう貢献してきたのかという課題を探るため長野県飯田市竜丘地区の報告をする。

本調査では、住民の組織的・継続的な実践に関して、1)飯田市の社会教育と公民館の役割を確認し、2)竜丘公民館の組織と事業について検討し、その上で3)住民へのヒアリング結果及び4)公民館職員へのヒアリング結果を示した。

一部ではあったが今回の地域住民へのヒアリング結果からは、住民と地域の子どものかわりにおいて、学校が一定の役割を果たしていることがうかがわれた。

[キーワード] 学校教育， 地域， 持続可能性， 住民の組織的継続的な実践， 公民館

### 1. はじめに-研究目的および方法-

報告者は、2011年7月の本学会青森大会において、地域住民が地域づくりの活動を展開する際に必要となる自己教育活動を援助し組織化する実践としての地域づくり教育に着目し、学校と地域との間でこれまで、どのような連携がなされてきたのか、その連携の中で学校が地域の教育にどう貢献してきたのかという課題を探るため長野県飯田市竜丘地区の報告をした。

そこでは、視点1:教育の豊かさ、視点2:住民の組織的・継続的な実践、視点3:環境にかかわる実践、という3つの視点にもとづき、文献調査、ヒアリング調査、参与観察の3つの調査方法で調査を行うという調査計画の全体像を示し(表1)、そのなかで主に文献調査及びヒアリング調査の結果を報告した。

本報告では、とりわけ視点2の住民の組織的・継続的な実践に関するヒアリング調査の結果を中心に報告する。なお、前回報告時に、「地域の持続可能性」とこの三視点の関連に

ついて質問が出たのでその点もあわせて報告する。

表1. 調査計画の全体像

調査方法 1. 文献調査	竜丘の自由教育の真髄を探る(木下陸奥・平成22年2月)自由画教育(熊本高工・1993年)大正時期の竜丘小学校下平芳太郎・校長と自由教育(世岡秀郎1996年)	長野県公民館活動史Ⅰ・Ⅱ(吉村午良・村山 正・古田十一郎編昭和62年3月31日)飯田市公民館活動史(田中秀典・今村八東・松嶋年一・小林恭之助・田中興編 平成6年3月31日)竜丘村誌(木下右治・太田政治編昭和13年10月25日)館報竜丘縮刷版(伊原真吾・田中興編平成4年3月31日・5月31日)地域づくりと公民館・飯田市竜丘公民館を事例に(宮崎隆志・2001.12)	開かれた自立性の構築と公民館の役割ー飯田市を事例としてーⅠ・Ⅱ(牧野篤・2011.01)
調査方法 2. ヒアリング調査	木下陸奥(元竜丘公民館・「竜丘の自由教育の真髄を探る」著者)へのヒアリング(2011.5.30)	下平尚志氏(竜丘公民館主事) 飯田市へのヒアリング(2011.5.30)	
調査方法 3. 参与観察	竜丘小学校のクラブ活動への公民館利用者の協力を参与観察(予定)		ギフチョウ保護に関する学校行事および公民館活動を参与観察(予定)

### 2. 調査の結果

飯田市竜丘地区における住民の組織的継続的な実践は、飯田市の社会教育と公民館を拠点に展開されている。そこで、以下に飯田市の社会教育と公民館の全体像と竜丘公民館の事業と組織について、文献調査の結果に基づ

き整理した上で、「学校教育は地域の持続可能性にいかに関与できるのか？」についての住民へのヒアリング結果を示す。

## 2-1. 飯田市の社会教育と公民館

飯田市公民館（2010）に基づき、飯田市の社会教育と公民館についての概況を以下に整理する。

戦後発足した飯田市の公民館は、地域に密着して、市民の自由な文化学習活動を支援し、地域づくりの基盤である人づくりに大きな役割を果たしてきた。そして、公民館発足から60年あまりが経過し、その間、社会、経済など公民館を取り巻く環境は大きく変容している。

公民館においては、2007年4月「住み続けたいまち 住んでみたいまち 飯田 人も自然も輝く 文化経済自立都市」を目指す都市像に掲げた第5次基本構造計画、自治基本条例、地域自治組織など市政の新しい枠組みがスタートした。この地域の仕組みが真に成立するには、自治の主体となるべき地域の担い手づくりが重要な課題となっている。

### (1) 公民館の役割

公民館は、地域の特色ある自然や文化を基底に、生活課題や地域課題の解決に向けた学習を組織し支援することにより、地域の住民の学びを通じた人づくりの場として、コミュニティの醸成や地域の担い手づくりに大きな役割を果たしている。

また、公民館の活動を推進する上では、地域住民一人一人が学習活動や地域づくりの主体であることを念頭に置き、多様な価値観や地域住民相互の学び合いを尊重している。

公民館の具体的な役割は以下のとおりである。

- ①誰もが気軽に利用でき、活動を促す「自由なたまり場」
- ②参加者の自主性、創造性、仲間づくりを

活かした「集団的な活動と交流の場」

③先人が築いた文化を自分たちのものとして、その知識を活かす「文化創造と発信の場」

④市民の生涯にわたる発達を促し、地域課題や生活課題に対応する「学習の場」

⑤人が人として尊ばれ、差別なく暮らせる「人間尊重の精神を学び合う場」

⑥健康を基礎とした心豊かな人づくり、地域づくりを進める「スポーツ、レクリエーションの場」

⑦地球の文化財の保全を通して地球の「歴史を伝える場」

⑧さまざまな学習、文化資料の提供による市民の学びのための「情報授受の場」

### (2) 飯田市の公民館の4つの運営原則

飯田市公民館では、以下の4つの運営原則により公民館運営を行っている。

#### ① 地域中心の原則

まちづくりを考えると、日常的に身近な地域から出発することが大切である。地域ごとに設置された公民館は常に地域を中心としてとらえた学びの場であるべきである。

#### ② 並立配置の原則

地域の規模や特徴は異なっても、公民館は20地区に対等に配置され、それぞれの活動が等しく尊重される。この原則は地域中心の原則を保障するものである。

#### ③ 住民参画の原則

公民館を設置し、そこに職員を配置することは行政の役割であるが、公民館の事業の企画運営は、地域住民によって組織された専門委員会や運営委員会、より身近な住民の単位である分館活動など、それぞれの事業が自発的な住民の意思に基づいて行われることが大切である。このような組織や活動は、飯田市の公民館の原動力になっている。

#### ④ 機関自立の原則

教育行政が一般行政から一定の独立性、中

立性を保っていることに鑑み、公民館が地域の社会教育機関として住民の主体的な学習活動を保証することは大切である。その意味で公民館が自立した体制をもっていることは重要である。

### (3) 専門委員会と分館の役割

飯田市公民館では、住民参画の原則を担保し、まちづくり委員会のなかで公民館の活動を具体的に推進する組織として、各地区において必要な専門委員会を設け、地域独自の活動を推進している。

また、飯田市内の公民館の各分館は、住民の生活に最も身近なコミュニティを形成する場として、子供からお年寄りまで、日常生活のたまり場として利用すると共に、身近な課題の解決、分館独自の事業など、住民同士のふれあいを大切にしながら主体的な活動を展開している。(資料1参照)

### (4) 地域自治組織における公民館

公民館は地域自治組織のまちづくり委員会において、地育力(地域の教育力)推進の拠点としての役割を果たす。そのために、公民館は教育委員会のもと、住民自治の充実にとって必要な地域の社会教育機関として、独自の役割を果たす。また、公民館の基本的役割を念頭に置きながら、まちづくり委員会の各委員会が取り組む活動に、教育の側面から関わっている。

飯田市公民館は、さまざまな原則や地域への役割などがあるため、地域の住民たちに利用されている。飯田市の総人口は104,745人、世帯数は38,129世帯(平成23年12月31日の時点)。そのうち691,823の人が公民館を利用している。この数字からは、地域住民が公民館を頻繁に利用していることが読み取れる。(資料2参照)

## 2-2. 竜丘公民館の組織と事業

### (1) 竜丘公民館の組織

#### ① 竜丘地区の概況

竜丘地区は、飯田市の中央部に位置しており、標高は365mから565mの間にある。面積は7.9平方キロであり、人口が6775人、世代数2272世代(2010年12月末時点)である。また、飯田市竜丘小学校には324家庭446名の児童が通っている。大正から1950年代中頃までは桑園と水田が広がり、養蚕が盛んで、地域内に製糸工場もあった。戦後、農道建設によって、住環境や交通条件が整備され、さらに宅地開発と共に、新住民が増加し、非農家や外国人が増えてきた。また農家の副業として水引業が盛んに行われていた。地域内には古墳をはじめ、著名な史跡が数多くある。

#### ② 竜丘地区の地域自治組織

飯田市は従来から概ね小学校区を単位として自治会や公民館を中心とした地域運営を行ってきた。飯田市内には18の地域自治区が設置されている。設置の趣旨としては、「市民に身近な事務事業を市民の意見を反映させて処理するとともに、地域の自治を促進するため(「飯田市地域自治区の設置等に関する条例第1条」)となっている。

地域自治区の設置に併せて、飯田市では、既存の地域団体を再編して、各地区に飯田市独自の「地域自治組織」を発足させた。(図1) 「地域自治組織」は、「地域自治区」内に設置される「地域協議会」と、市の事務を分掌し、かつ地域協議会に係る事務を所掌するための事務所がおかれている「自治振興センター」という公式の組織、そして「まちづくり委員会」と呼ばれる任意団体によって構成されている。竜丘地区の地域自治組織もこのような組織となっている。(図1)

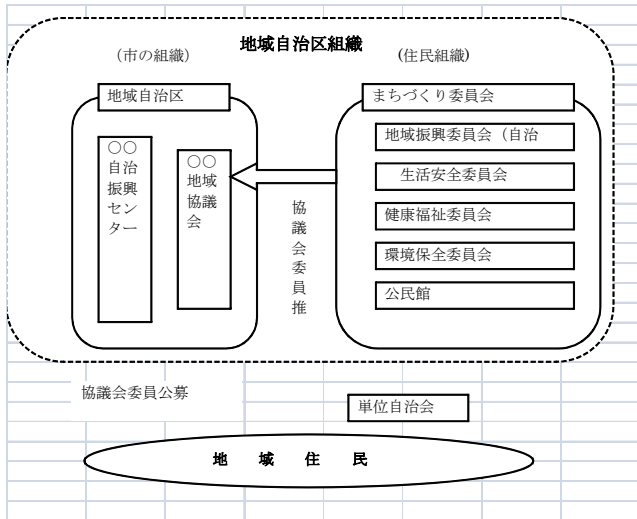


図1 「地域自治組織のイメージ図」

③ 竜丘地区公民館の運営組織

「地域自治組織」導入以前の公民館には、公民館運営審議会が設置されていた。「地域自治組織」導入後に、公民館運営審議会にかわり新たに竜丘公民館専門委員会が設置され、各委員会の調整を行う企画委員会と「文化」、「体育」、「広報」、「民俗資料保存」、「社会」の5つの各委員会で構成されている。(図2) (資料2)

図2.竜丘公民館委員会の運営組織



(2) 竜丘地区公民館の事業

竜丘地区公民館の事業の特徴として、学社連携があるとされる。(汪・佐藤 2011)「平成22年度飯田市公民館活動記録」によれば、平成22年度に竜丘地区公民館で実施された事業数は29とされている。この29事業は、すべて同じ位置付けではなく、実施主体により以下の4つの区分に分けられる。

① 飯田市教育委員会事業

公民館主催事業として実施される事業であり、予算は飯田市教育委員会予算として執行される。平成22年度では、29事業6事業がこの区分に該当する。

② 丘地区自治会事業

竜丘地区には図1の「単位自治会」として「竜丘自治会」があるが、そのほかに各地区に「駄科区」、「長野原区」、「時又区」、「上川路区」、「桐林区」の5区の各自治会がある。各区の世帯数は一番少ない上川路区が119戸(461人)で最も多いのが駄科区の850戸(2,292人)である。世帯は、各区自治会と竜丘自治会の双方に自治会費を払っている。竜丘自治会の年会費は一世帯9千円、各区の自治会費(年会費)は、9千円~1万7千円と幅がある。このほか、その地区の住民になる際、最初に支払う「加入金(6千円~10万円)」があり、さらに毎年「負担金(0円~10万円)」を徴収している地区もある。

こうした自治会収入を財源に実施される公民事業がある。平成22年度では、29事業12事業がこの区分に該当する。またこれとは別に飯田市教育委員会事業と共催の形で実施している事業が4事業ある。

③ 利用者団体事業

公民館には、さまざまな住民により構成される利用者団体がある。これらの利用者団体は、各団体の予算で講座などの事業を開催している。この場合、公民館は各利用団体にサークル室などの会場を提供(無料)しているがそれ以上の予算措置はしていない。平成22年度では、「古墳を考える会」など29事業4事業がこの区分に該当する。

④ その他

その他、教育委員会以外の市予算や市の外部予算で開催される事業がある。

2-3. 住民へのヒアリング結果

調査は、2011年9月15日に飯田市竜丘地区の公民館での職員及び住民の方々へのヒアリングを行い、またその結果の確認と補足の質

問を12月5日に竜丘公民館職員に行った。ヒアリングの内容は、「学校教育は地域の持続可能性にいかに関与できるのか？」という問題意識に基づき、「竜丘公民館との関わり」、「学校との関わり」、「公民館以外での子どもとの関わり」について4人の地域住民にヒアリングを行った。

まず「竜丘公民館との関わり」については、竜丘公民館を利用する方々は60歳以上の高齢者が多く、目的は「自分の興味」が多数である。さらに、利用者は、平日は毎回ほとんど同じメンバーだが週末は若者や家族利用もある。

「学校との関わり」に関しては、5月～7月頃、小学校クラブ活動に公民館利用団体が指導を行っている。そのほかにも「竜丘の道しるべ」など、学校と一緒にやっている事業では学校教員の意見も踏まえて進めている。さらに「子どもとの交流を通して、ご自身にどのような影響があったのでしょうか？そして、この地域全体に対して、どのような影響があったと思われますか？」という質問に対して、「子どもの想像力が驚くほどすごいし、子どもたちから元気をもらえる。子どもと一緒にいるときに様々な話があって楽しい(Mさん、女性)」、「昔からこの地域の古墳のことに関しては知っているため、自分の知識を生かして、公民館の事業を通して、地域に貢献している。(Iさん、男性)」といった回答があった。

「公民館以外での子どもとの関わり」については、全員が「学校側から頼まれたときに」と回答した。(資料3参照)

#### 2-4.公民館職員へのヒアリング

住民へのヒアリング結果を踏まえて、2011年12月5日に下平飯田市竜丘地区公民館主事より以下のようにヒアリング結果を得た。

「昔、中学校が竜丘地域から移動していたことに対しては、住民たちはほとんど何も感じていなかったが、現在から見ると、やはり小学校は地域にとってなくてはならない場所

であることが気づいた。

まず、竜丘小学校の子供たちは、自分たちが「竜丘の子」だと思ふ必要がある。つまり、地域への愛着することができるだろう。

竜丘小学校は、ただ存在しているだけで、地域に開いていることができる、と思われる。特に何もしなくても、地域に効果がある。学校側は地域を受け入れることによって、地域が良くなれるし、地域の住民も元気になれる、従って、地域が活性化になれる。つまり、学校側は地域を受け入れるだけで、大切なことである。

なぜかという、例えば、大人の学校(老人が多くて、60歳以上)この事業では自分たちが学ぶしかない。教えるチャンスがなかなかないので、このような状況の中、学校側ができる範囲で受け入れれば、お年寄りたちが学ぶことを教側になり、子供たちとのふれあい機会も増えるし、こどもたちにもであろう。

このようなことを通じて、お年寄りたちはこの地域と子供たちに役に立っていることが感じるから、心理的にもうれしいと思われる。自分が地域にとって役に立っていることが大切なことである。公民館と学校の重要なことが見えるだろう。」

#### 3.「地域の持続可能性」と三視点の関連について

報告者は、2011年7月の日本環境教育学会青森大会での報告の際、「地域の持続可能性」と報告者が示した三視点「視点1：教育の豊かさ」、「視点2：住民の組織的・継続的な実践」、「視点3：環境にかかわる実践」の関連性について質問を受けた。「学校教育は地域の持続可能性にいかに関与できるのか？」という研究課題を深めるにあたり「地域の持続可能性(Sustainability)」とは何かを定義しておくことが重要という。

「持続可能性」概念は、「持続可能な開発」の概念とともに発展してきたと考えられる。

「持続可能な開発」概念の歴史的出発点は、1972年の国連人間環境会議とされる。(上原2009)「地域の持続可能性」を問う際、「環境に関わる実践」に着目する理由はこの点にある。

1992年の国連環境開発会議(地球サミット)の成果として合意された、地球環境行動計画「アジェンダ 21」の第36章で「持続可能な開発に向けた『教育の再構築』」が提起された。これを受けて1997年の「環境と社会に関する国際会議」でESDへの国際的認識が広がった。2002年の「持続可能な開発のための世界会議(ヨハネスブルク会議)」において、日本政府と日本NGOが共同提案した国際「持続可能な開発のための教育」の10年、国連総会において国際的に実施されている。このように、ESDでは「教育の再構築」が求められているが、今日の教育の豊かさを論じるにあたり、過去の「教育の豊かさ」を確認し、その成果や課題を踏まえることなしに再構築は不可能である。そのことが本研究において「(その地域の過去の)教育の豊かさ」を1つの視点とする理由である。

阿部(2010)は、ESDの現状と課題を示し、その中で、日本のESD研究の現状を、ESD理論、学校教育のESD、地域づくり(社会教育)としてのESDの3区分として述べている。ここでは、「地域住民が主体的・創造的に持続可能な開発に参加することなしに持続可能な地域づくりの継続はありえない」と述べられており、これが「地域の持続可能性」をとらえる視点として「住民の組織的・継続的な実践」に着目する根拠といえる。

以上が、「地域の持続可能性と学校教育」をテーマとする本研究が対象地域を「視点1:教育の豊かさ」、「視点2:住民の組織的・継続的な実践」、「視点3:環境にかかわる実践」という3つの視点で分析しようとする理由である。

#### 4. 本報告の結論と今後の課題

本調査では、住民の組織的・継続的な実践に関して、1)飯田市の社会教育と公民館の役割を確認し、2)竜丘公民館の組織と事業について検討し、その上で3)住民へのヒアリング結果及び4)公民館職員へのヒアリング結果を示した。一部ではあったが今回の地域住民へのヒアリング結果からは、住民と地域の子どものかかわりにおいて、学校が一定の役割を果たしていることがうかがわれた。「(交流を通して)子どもたちから元気をもらえる。」という住民の方のコメントのとおり、子どもの存在は住民の健康や地域の活性化に重要な役割をもっていると考えられる。子ども、住民、学校、公民館、この四者がどのような関係をもちながら持続可能な地域に向けて、地域を発展させようとしているのかについて、現段階ではまだ十分に明らかではないが、今後、学校側及び子どもたちへの調査を進めることにより、より具体的な地域の状況が把握できると思われる。

#### <資料>

資料1. 飯田市公民館(2010)の公民館利用者状況資料等

資料2. 竜丘公民館の組織図等

資料3. 2011年9月14日の竜丘公民館利用者の皆さんへのヒアリング結果

#### <引用文献>

飯田市公民館, 2010, 平成22年度飯田市公民館活動記録, 飯田市公民館.

汪乃佳・佐藤智子, 2011, 「, 公民館と活動の連携について」, 『開かれた自立性の構築と公民館の役割—飯田市を事例として— I・II (牧野篤・2011.01)』, 68-72.

阿部治, 「持続可能な開発のための教育」(ESD)の現状と課題, 環境教育, Vol19-2, 21-29.

上原有紀子, 「国連・持続可能な開発のための教育の10年」をめぐって, レファレンス, 平成17年3月号, 63-82.